76

西鶴作品にみる身体に関する語（八）

誌上発表

計良　吉則
赤城少年院 医務課診療所

『万の文反古』は，西鶴没後三年めの元禄九年（1696）に刊行された．大本五巻五冊，全十七篇からなる書簡体の小説集で，中・下層の町人の苦悩の相が描かれている．

本作品の中の身体に関する語に着目し，それについて調査することは，当時の人びとの身体観を知るうえで意味のあることと考える．

まず，全身を表すものの中では「身」という語が圧倒的に多く（87か所），前回調査した「日本永代蔵」と共通している．実際には「身のつづかぬ事」「身の取置」「若年の身」「武士の身」「その身のため」のように用いられている．「骨」は4か所，「肌」は2か所であった．

頭部においては「首」が9か所と最も多く，「首にまきて」「首うたれし」のように用いられている．「面」は7か所，「頭」は6か所であった．

躯幹において最多は「脇」の6か所で，「皆々脇明けて」「脇指捨てて」のように用いられている．また「胸」は5か所，「腹」は4か所，「腰」は3か所であった．

四肢の中では「手・指」が圧倒的に多く，89か所みられ，この結果はこれまで調査した西鶴作品に共通している．実際には「手まはし」「手づまり」「手扣いて」「横手を打つて」「手に取る」のように用いられている．「足・脚」は19か所で，「足元はやく」「足をひかせ」「片足ふそくあつて」のように用いられている．

五孔では「眼・目」が最も多く，57か所みられた．「目に見ずして」「目に立申候を」「目の上に二寸ばかりの切疵」のように用いられている．「口」は29か所で，「口を揃へて」「下子どもの口へも」のように用いられ，「鼻」は4か所，「耳」は3か所であった．

分泌物等では「涙・泪」が多く，8か所みられ，「泪は白川の浪に滴る」のように用いられている．「血」は3か所，「息」は1か所のみで，「鼻で息する程」のように用いられていた．

『万の文反古』において特筆すべきことは，巻二第二「安立町の隠れ家」に「疝気」に関する記述がみられることである．親の敵として命を狙われた男が，自分は別人であると申し開きをするくだりで，「……大方様子も見られよ．疝気に筋骨痛み，主人にお暇申し，熊野へ湯治いたすの所に……」とある．「疝」または「疝気」については，丹波康頼の『医心方』（984）に「疝は痛ナリ，或ハ小腹痛ミテ大小便ヲ得ズ，或ハ手足厥冷シテ臍ヲ繞リテ痛ミテ白汗出デ，或ハ冷気逆上シテ心腹ヲ槍キ，心痛又ハ撃急シテ腸痛セシム」とある一方で，津村淙庵の『譚海』（1795）に「せんきの虫」とは「白き虫，うどんを延ばしたるやうな物」とある．さらに，笑話本『即答笑合』（1796）を原話とする古典落語「疝気の虫」では，睾丸部分の異常が語られる．つまり，平安期の「疝」と江戸期の「疝気」にはズレが生じていて，前者が急な腹痛全般を指すのに対して，後者は睾丸部の症状や「虫」の関与が指摘されており，症状の拡がりがみられている．

江戸期の「疝気」が今日の「フィラリア症」であるという認識に至った歴史的経緯については，杉浦（2013）が詳しく論述している．実際，『万の文反古』の「疝気」の記述もフィラリア症と矛盾しない．上記「疝気に筋骨痛み」はフィラリア症の急性・亜急性期に生じる筋肉痛，関節痛，全身性の神経痛様の疼痛と思われる．当時の「疝気」に対する治療は，温石による患部の暖め，当帰や茯苓など生薬の内服，鍼灸，温泉での湯治くらいしかなかった．上記「熊野へ湯治いたす」は白浜や勝浦が湯治場として想定されるが，長野県白骨温泉には今でも「疝気ノ湯」なるものがあり，宮城県鳴子温泉には昔から「疝気車湯」と歌われた場所がある．